

私は convenience を捨てられる

昨日、映画の開始時間を間違え、銀座の真中で、2時間近くも時間を潰さなければならなくなった。幸いお天気もよく風も涼しかったので、コンビニで缶ビールとミックスマツを買ってビルの生垣に腰をかけながら、道行く人々を眺めていた。

五月末に初孫が生まれたばかりの私は、赤ん坊を抱いた若い母親や、乳母車に偉そうにふんぞり返り、小さな足を突き出している赤ん坊に眼がいつてしまうのだった。

そういえば、こんな都会の真中で乳母車を押す母親が多く見られるようになったのも、殆どの駅にエレベーターかエスカレーターが設置されたからなのだと思います。目の前に聳える高層ビルが建てられるようになったのも、その高さにまで人々を運ぶエレベーターが動くからであり、又ポンプが水を押し上げてくれるからであった。本当に電気のお陰で我々の生活は便利になった。

convenient とは、con(一緒に)+veni(行く)ent=一緒に行ける状況という意味だそう。しかし、若しそれが原子力によって造られた電気であるなら、私は一緒に行くことは御免蒙りたい。昨年の3.11を体験し原発の怖さを知った今となつては、あのような気違い機械が側にいて安逸な眠りを貪ることは出来ないだろう。

発電とは所詮タービンをどうやって回すかという問題である。その多くは、水蒸気に頼っている。つまりたかがお湯をどうやって沸かすかという問題に過ぎない。たかがそれだけでしかないものに、一度暴れだすと遠巻きにしてうろたえるしかない気違い機械で、しかも使用後の核燃料廃棄物の処理問題に眼を瞑っている原子力などという方法に頼る必要は豪もない。現在地球が活躍期に入っていることは日々感じていることではないか？太平洋プレート、フィリピン海プレート、北米プレート、そしてユーラシアプレートという四つのプレートの上に乗っている地震多発国日本において、近いうちに再び大地震が起こったとしても、何の不思議もない。津波の高さが10mであれ、30mであれ、そんなことは実は全く関係がないのだ。強震度の地震が起こり、原子炉建屋とタービン建屋の間を繋いでいる冷却水を運ぶパイプに亀裂が入り、水が漏れ出すだけでもう一巻の終わりなのだ。原子炉から熱を奪えなくなり、メルトダウンを待つしかないことは3.11で全国民が知ったはずではないか？津波の話に論点を逸らされてはいけない。

私は思い出す。かつて石原慎太郎が日本も核を持つべきだと言ったとき、大江健三郎がこう言って反発した。「それって一緒に死のうということではないですか？私は絶対に一緒に死にたくはありません。」

この夏の電力が不足すれば、convenientな生活が確保できないと頻りに喧伝されている。又中小企業の倒産が頻発し、経済が停滞し、それにつれ株価も更に下値を切り下げることだろう。しかし、この夏どれだけconvenienceが奪われ、経済が停滞するとしても、私は何ら迷うことなくconvenienceを捨てられる。千葉の県人 鎌田 留吉